日新聞　'20.2.2　第3種郵便物認可

駄菓子屋付き 開かれた特養

仙台の「萩の風」 地元児童ら出入り

子どもたちの声が響く、ちょっと不思議な老人ホームが仙台市若林区にある。施設の中に駄菓子屋があり、毎月の子ども食堂ではお年寄りと子どもが一緒に昼ごはんを食べる。福祉を変えたいという若い施設長の思いが、形になった。

特別養護老人ホーム「萩の風」では、別館を含めて約100人の高齢者が暮らす。3階建ての建物に入ると、受付の右側に「駄菓子屋 かみふうせん」と書かれたのれんが下がる。ラムネやアメなどの駄菓子が何十種類も並び、瓶入りのジュースも。毎日朝10時から夕方4時まで開く、昔ながらの駄菓子屋だ。

「こんにちはー」

「まだ大丈夫ですか？」

夕方、地元の小学生たちが自転車に乗ってやってきた。お菓子を買いながら、部屋の奥で入居者のお年寄りが話したりお茶を飲んだりしている様子をながめている。駄菓子屋ができたのはおととし。玄関の近くは少しうるさいくらい、にぎやかになった。

子どもでにぎわう施設内の駄菓子屋＝仙台市若林区、「萩の風」提供

施設にぎわい 子ども食堂も

田中伸弥さん

施設長の田中伸弥さん(38)は、常々「特養の閉鎖的なイメージを変えたい」と考えていた。最期のときを過ごすかもしれない場所だからこそ、地域に開かれるべきだ。「子どもたちの居場所を」という地元の声もあって駄菓子屋が実現。今もあれこれとアイデアを実行に移している。

毎月施設で子ども食堂を開くほか、施設の庭を外からも入れる公園に改修中。道路沿いの生け垣を撤去して、外からもお年寄りの暮らしぶりが分かるようにした。一連の取り組みが評価され、田中さんは昨年の「社会福祉ヒーローズ」賞(主催・全国社会福祉法人経営者協議会)の大賞に選ばれた。

仙台大を卒業後、介護の仕事につき、数年間をなんとなく過ごした。転機は25歳。兄がバイクの事故で寝たきりになり、翌年には母も病気で入院。そのまま亡くなった。ひとごとのように感じていた「死」に本気で向き合うようになった。

29歳で今の施設長の立場に。「若すぎる」とも思ったが、母をみとった経験を糧に、自分が思う福祉を形にするチャンスだと考え直した。

命学ぶ場にも

子どもや地域の人が自由に出入りすることに、職員から反対の声もあった。感染症などを心配し、「これで命を守れるのか」と辞めていった職員もいる。

田中さんの脳裏に焼き付いている光景がある。入居者の一人が亡くなり、職員全員で見送っていると、駄菓子屋に集まっていた子どもたちが静まりかえった。「なにが起こっているのか察したのでは」。老人ホームが、子どもにとって「命を学ぶ場」になることに気づいた。

法令の範囲内なら「特養はもっと色々な個性があっていい」と田中さんは考えている。最期のときを過ごす場所にも、今よりもっと多くの選択肢があるべきだと思う。

(申知仁)